The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	上博楚簡『陳公治兵』の基礎的検討
Author(s)	草野, 友子
Citation	中国研究集刊. 2015, 60, p. 35-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58655
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　称号（総六十号記念号）平成二十七年六月　三五―五二頁

上博楚簡『陳公治兵』の基礎的検討

草野友子

上海博物館が所蔵する戦国時代の楚の竹簡「上海博物館蔵戦国楚竹書」（上博楚簡）は、春秋時代の楚国に関する故事を豊富に含んでいる。二〇一二年十二月に出版された『上海博物館蔵戦国楚竹書（九）』（馬承源主編、上海古籍出版社）には四篇の楚国故事が収録されており、そのうちの一篇、『陳公治兵』は、楚の戦争の状況や軍隊の配置、行軍や攻撃の方法などが記載されている。その内容は伝世文献には見られず、楚の軍事の実態を窺い知ることができる資料である。

整理者は、「本篇は、前半部分は比較的整っている一方、後半部分は竹簡が欠損し、文意が不明である部分も多い。」と述べている。しかし、先行研究においてすでに整理者の竹簡排列には問題があることが指摘されており、難読箇所も多く存在する。

そこで、本論では、竹簡の排列案を検討して本篇の復原を試み、本篇の内容について基礎的な検討を加えていきたい。

一、基礎情報

『陳公治兵』の整理者は、陳佩芬氏。全二十簡、完簡は九簡、残簡は十一簡。簡長は四十四cm。編綫は三道、簡端は平斉、右契口。上端から第一契口までは一・三cm、第一契口から第二契口までは二十・七cm、第二契口から第三契口までは二十・七cm、第三契口から下端までは一・三cm。総字数は五百十九字、そのうち合文は五、重文は五。句読符が二十三箇所見られる。篇題は見えず、「陳公治兵」は内容に基づいて付けられた仮称である。

整理者によると、本篇は、楚の政局が安定してきた頃に楚王が軍隊を視察し、陳公に対して執事人（職務を補佐する官吏）を助けて士卒を整えるよう要請し、陳公はその命令に従って軍隊を整えたという内容であるとされる。

整理者は、本篇の第1簡に「楚邦少安、君王安」とあり、これは平王の初期にしばらく仁政が施され、社会が安定していたことを示しているとして、本篇の楚王は「平王」（在位、前五二九～前五一六年）であると推測している。ただし、本篇中には、「王」「君王」とあるのみで、具体的な王名は見られない。また、本篇の主要人物である陳公

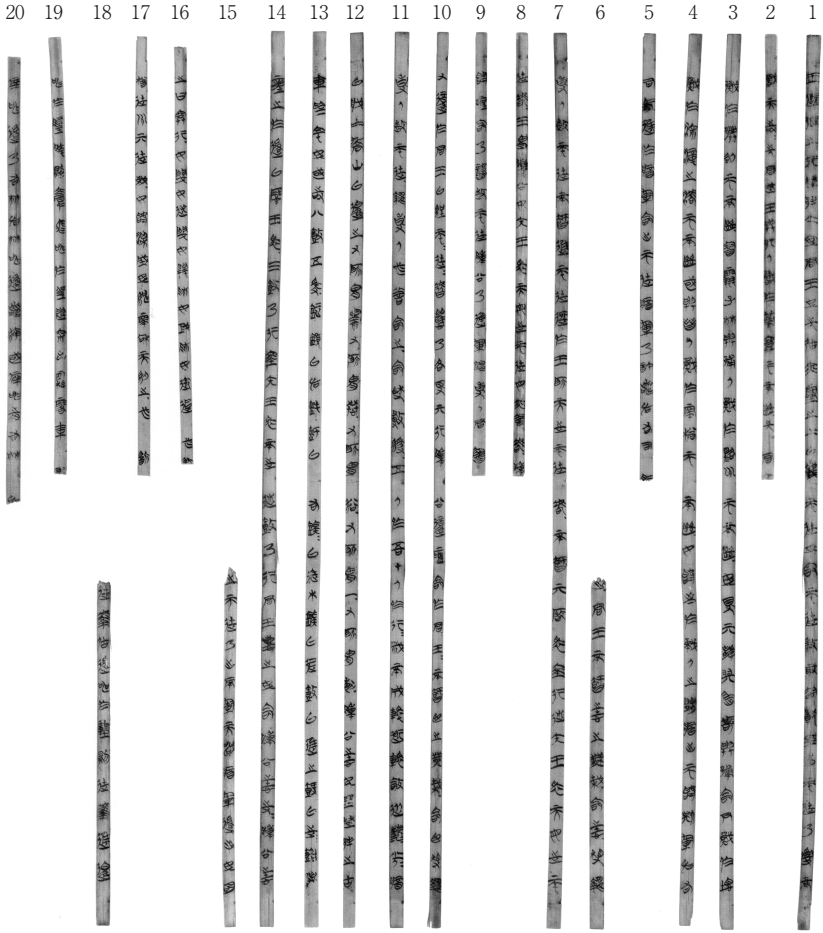

図1

は、伝世文献には見えない人物であり、陳公とは誰なのかという問題については特定しがたい。

さらに本篇は、整理者の竹簡の分類に問題があると見られる。竹簡の分類の際に一つの指標となるのが契口の位置であるが、本篇の中には契口の位置が合わないものがある（図1）。

以下に挙げる竹簡の簡長と契口の位置について、整理者が提示する測定値と、竹簡の実寸の写真図版をもとに筆者が計測した測定値をまとめると、図2の通りである(注1)。

第16簡は、整理者は第二契口について言及していないが、写真図版では第二契口が確認できる。第一契口

竹簡番号	簡長（cm）	頂端～第一契口	第一契口～第二契口	第二契口～第三契口	第三契口～下段	備考
1	44	1.3	20.7	20.7	1.3	完簡。
2	21.9	1.3 →1.2	20.6 →18.6	未記載 →2.1～	無	下段残欠。20.6cmは、第一契口以下の長さ。
3	44	1.3	20.7	20.7	1.3	完簡。
4	44	1.3	20.7	20.7	1.3	完簡。
5	22 →21.8	1.3	20.7 →19.5	未記載 →1.0～	無	下段残欠。
6	17.3	無	無	～16	1.3	上段残欠。
7	44	1.3	20.7	20.7	1.3	完簡。
8	21.8	1.3	20.5？	無	無	下段残欠。第二契口は見えず。
9	21.8	1.3	20.5？	無	無	下段残欠。第二契口は見えず。
10	44	1.3	20.7	20.7	1.3	完簡。
11	44	1.3	20.7	20.7	1.3	完簡。
12	44	1.3	20.7	20.7	1.3	完簡。
13	44	1.3	20.7	20.7	1.3	完簡。
14	44	1.3	20.7	20.7	1.3	完簡。
15	17.7	無	無	未記載 →～15.4	1.3	上段残欠。
16	20.7	～0.7	未記載 →18.1	未記載 →1.9～	無	上段やや残欠、下段残欠。
17	21.8	1.3	20.6 →約18.5	未記載 →約2.0～	無	下段残欠。20.6cmは、第一契口以下の長さ。
18	17.1	無	無	未記載 →～15.8	1.3	上段残欠。
19	21.7	1.3	20.4 →19.3	未記載 →1.1～	無	下段残欠。20.4cmは、第一契口以下の長さ。
20	22.2	未記載 →～0.3	20.5	1.7 →1.4～	無	上段やや残欠、下段残欠。

図2

（※上段は整理者が提示する測定値、「→」は筆者による測定値を示す。「～」は前または後ろが欠損しており、現存の長さを示す。）

から第二契口までの長さは十八・一cmであり、本篇の契口間の長さと合わない。

第17簡は、整理者は「第一契口以下は二十・六cm」と述べ、第二契口については言及していない。第二契口は写真図版では確認できないが、最下部の文字と下から二字目の文字との間には空間があり、ここに第二契口があるならば、第一契口から第二契口までの長さは約十八・五cmであり、本篇の契口間の長さと合わない。

第18簡は、確認できるのは第三契口のみで、第一契口、第二契口は残欠している。

第19簡は、整理者は「第一契口以下は二十・四cm」と述べ、第二契口については言及していないが、写真図版では第二契口が確認できる。第一契口から第二契口までの長さは十九・三cmであり、本篇の契口間の長さと合わない。

第20簡は、整理者は、第一契口から第二契口までは二十・五cmと述べる。本篇の契口間の長さはすべて二十・七cmであり、〇・二cmの誤差がある。整理者は、第8簡と第9簡の第一契口から第二契口までの長さは二十・五cmとしているが、実際に写真図版を確認すると、第二契口の部分が残欠しているため、実際はもう少し長い可能性がある。

以上のように、本篇の中には契口の位置に問題があるものがあり、これらを同一篇とみなしてよいかどうかは疑わしい(注2)。

また、本篇は、竹簡の排列に問題があり、整理者の排列のまま全体を通読することは困難である。先行研究において竹簡の排列案がいくつか提示されているものの、依然として全体を通読できる排列案は見られない。

そこで、以下、竹簡を再排列した上で釈読を提示し、本篇の内容について検討していきたい。

二、竹簡排列の検討と分類

先行研究において提示されている竹簡の排列案は、次の通りである。

・高佑仁…4＋5＋15
・蘇建洲…3＋2＋4
・張崇礼…1、4＋5＋15、6＋7＋8＋14、9、16＋17、10＋11＋13＋12
・林清源…1、6＋7＋8、9、10＋11＋13＋12、14、3＋2＋4前段、4後段＋5＋15、16、17、18、19、20

以上を参考に、竹簡を再排列し、それぞれ検討を加えていきたい(注3)。

[1]

王迈(注4)(跖)郎(固)之行、楚邦少安、君王安(焉)先居灾(災)𡨦(亂)之上(注5)、㠯(以)雚(觀)市(師)徒安(焉)、命市(師)徒殺取禽(禽)獸(獸)、夷(逸)脅(兔)(注6)、市(師)徒乃𡨦(亂)、不

王 固に跖(ゆ)くの行、楚邦少し安んじ、君王焉(ここ)に先ず災乱の上に居りて、以て師徒を観る。師徒に命じて禽獸を殺取せしむるも、兔を逸し、師徒は乃ち乱れ、不【1】

ここでは、楚国が少し安定している時に、楚王が軍隊を視察したことが述べられている。この箇所では、軍事演習中に、師徒に禽獸を捕らえるように命じたが失敗し、それによって師徒が混乱した様子が描かれている。

第一簡と第二簡以降とは直接つながらず、本簡をどこに配置すべきかは確定できないが、師徒が混乱する状況を見て、楚王が治兵の必要性を感じた場面であると推測される。

[3+2+4+5+15]

戰於鄴(蔡・葉)咎(注7)、市(師)不𢿱(絕)I。酓(熊)霏(雪)(注8)子柰(麻)與郚(巴)人戰於駱州、市(師)不𢿱(絕)I。安(焉)旻(得)亓(其)𢿱(援)羿(旗)(注9)。屈㝵(㝵)與郚(巴)(注10)命(令)尹戰於塱(息)、【3】戰(戰)而時II(持之)(注11)。先君武王與邔(鄖)人戰(戰)於英(莆・蒲)寘(注12)、市(師)不𢿱(絕)I。先君文……【2】戰於涂(沮)漳之滸(滸)(注13)、市(師)不𢿱(絕)。或(又)與晉人戰於兩棠(注14)、市(師)不𢿱(絕)I。女(如)既至於栽(郄・仇)(注15)人之閑(間)、牒(將)出市(師)。既斯軍(注16)、左右【4】司馬進於牒(將)軍、命出市(師)徒、牒(將)軍乃許若(諾)、左右司馬……【5】……之市(師)徒乃出、伓(背)軍而戟(陳)、牒(將)軍逡(後)出安(焉)、名【15】

鄴咎に戦い、師絶えず。熊雪子麻 郚人と駱州に戦い、師 絶えず。焉に其の援旗を得。屈㝵 巴の令尹と息に戦い、【3】戦いて之を持す。先君武王 鄖人と蒲寘に戦い、師 絶えず。先君文〔王〕……【2】沮漳の滸に戦い、師 絶えず。又た晋人と両棠に戦い、師 絶えず。如し既に仇人の間に至れば、将に師を出さんとす。既に軍を斯(はな)れ、左右【4】司

馬 将軍に進み、師徒を出すを命じ、将軍は乃ち許諾し、左右司馬……【5】……の師徒乃ち出で、軍に背きて陳し、将軍後に出で、名【15】

蘇建洲氏は、第1簡と第2簡～第4簡とは関連性が強くなく、第1簡を簡の冒頭とする必然性がないと述べた上で、3＋2＋4という排列を提示する。そして、このように排列すれば、敘述の過程は熊雪―武王―文王―荘王（戰於兩棠）となる、と述べる。

確かに楚国の時系列から考えれば、この排列案は妥当であり、熊雪→屈髳→楚の武王（在位、前七四一～前六九〇）→楚の文王（在位、前六九〇～前六七七）→楚の荘王（在位、前六一四～前五九一）という順序で記されていると考えられる。簡文には荘王の名は見えないが、「又與晉人戰於兩棠」というように「又」の字が書かれていることから、残欠部分に荘王の名があり、「戰於沮漳之滸」も荘王の時代の戦いである可能性がある。

高佑仁氏は、第5簡と第15簡とを綴合する案を提示し、以下のように述べる。

「進於將軍」は、整理者は「左右司馬要在將軍前面」と述べているが、その後に「將軍乃許諾」というのは道理に合わない。将軍は軍隊の中で実質的な決断権を持っており、誰かから承諾を得る必要はない。それゆえ将軍の「許諾」は、ある人物の何らかの軍事的な提案があったためであると考えられ、このことから「左右司馬進於將軍」の「進」は、進言という意味で解釈すべきである。そして、「既斯（？）軍」は、すでに開戦しなければならなくなったという瀬戸際を示しており、左右司馬は将軍に師徒を出すよう進言し、将軍はそれを承諾し、第15簡で「師徒乃出」に至る。このように考えれば、第5簡と第15簡は綴合すべきであり、「命出師徒…將軍乃許諾…師徒乃出」がこの簡を綴合する上でのキーワードであり、二、三字分が残欠している。

確かに、高佑仁氏の解釈は可能性の一つとして考えられるが、第15簡は非常に短い竹簡であり、現時点では確定しがたい。

［6＋7＋8］

……此一。君王不智（知）性（狂）之無栽（才）一、命性（狂）一𢿱（相）𢿱（執）【6】事人敓（整）帀（師）徒。不智（知）進帀（師）徒逕（恆・極）於王所（注17）、而坦（止）帀（師）徒虘（乎）一。不智（注18）（知）亓（其）啓卒（卒）寔（垂・陵）行（注19）、述（遂）内（納）王卒

（卒）、而毋𢓊（止）帀（師）【7】徒虘（乎）ㄧ。王胃（謂）陳公、「女（汝・如）[注20]内（納）王卒（卒）、而毋𢓊（止）帀（師）徒、毋亦善虘（乎）ㄧ。」陳……【8】

……此。君王 狂の才無きを知らず、狂に命じて執【6】事人を相けて師徒を整えしむ。知らず師徒を進めて王所に極（いた）り、而して師徒を止めんや。知らず其れ卒を啓きて行を陵え、遂に王卒に納り、而して師徒を止むること毋からんや。」と。【7】王 陳公に謂う、「如し王卒に納り、而して師徒を止むること毋ければ、亦た善なること毋からんや。」と。陳……【8】

第6簡・第7簡・第8簡は、前後のつながりからもこのように排列すべきであると考えられる。この箇所は陳公と楚王との対話形式となっており、楚王が陳公に対し、執事人を助けて軍隊を整えるよう命じたことが陳公の口から語られている。

[9]

既聖（聽）命、乃𣪘（逝）[注21]敓（整）帀（師）徒。陳公乃遺（就）軍𣪘（執）事人、君魯……【9】

既に命を聴き、乃ち逝きて師徒を整う。陳公は乃ち軍の執事人に就き、君魯……【9】

この簡は、先行研究においても排列が困難であるとされており、現時点では確定できない。

[14]

童（踵・動）之於逡（後）、㠯（以）厚[注22]王卒（卒）ㄧ。三鼓乃行、𡨦（災）内（納）王卒（卒）不𢓊（止）、述（遂）鼓乃行。君王憙（喜）之安（焉）、命陳公性（狂）寺ㄧ（待之）。陳公性（狂）【14】

之を後に動かし、以て王卒を厚くす。三たび鼓して乃ち行き、災あるも王卒に納りて止まらず、遂に鼓して乃ち行われ、君王之を喜び、陳公狂に命じて之を待たしむ。陳公狂【14】

この簡も陳公の発言部分であると見られる[注23]。張崇礼氏は第6簡～第8簡の後ろにこの簡を排列しているが、前後関係が不明瞭であり、そのように排列してよいかどうかは確定しがたい。

[10＋11＋13＋12]

又逡（復）於君王、㠯（以）緄（盈・懲）[注24]帀ㄧ徒ㄧ

（師徒。師徒）虘（皆）懼、乃各旻（得）亓（其）行。陳公遏（復）聖（聽）命於君二王二（君王。君王）不智（知）臣之無栽（才）一、命臣梋（相）𩍐（執）【10】事人敓（整）帀（師）徒一、𩍐（執）事人必善命之一。命梋（相）敷（敷・輔・扶）緩（援）一、五人於吾（伍）、十人於行二（行、行）栽（列）不成、𨑓（萃）衙（率）𨑓（萃）敏（令）從灋（廢・法）[注25]。尖二（小人）牒（將）【11】車爲宝（主）安（焉）、或時（持）八鼓五𠦪[注26]一、鉦鍔（鐃）目（以）左、鈍（錞）釪目（以）右、鎤二（金鐸）目（以）徙（跪・坐）[注27]、木鎤（鐸）目（以）记（起）、鼓目（以）進之、𩠐（鼙）目（以）坴二（止之）。𢿱澫【13】目（以）戕（壯）士、喬山目（以）退之[注28]。又（有）所胃（謂）槐（威）、又（有）所胃（謂）恭一、又（有）所胃（謂）綌（裕）[注29]一、又（有）所胃（謂）一一、又（有）所胃（謂）剫（專・斷）[注30]一。陳公性（狂）安（焉）巽（選）楚邦之古（故）【12】

又た君王に復して、以て師徒を懲しむ。師徒皆な懼れ、乃ち各其の行を得。陳公復た命を君王より聽く。君王 臣の才無きを知らず、臣に命じて執【10】事人を相(たす)けて師徒を整えしめ、執事人は必ず善く之に命ず。相(あい)扶援するを命じ、五人を伍と於(な)し、十人を行と於し、行成らざれば、萃は萃令に率い法に従う。小人【11】車を将(ひき)いるを主と為し、或いは持ちて八たび鼓し五たび𠦪(あ)げ、鉦鐃以て左し、錞于以て右し、金鐸以て坐し、木鐸以て起ち、鼓以て之を進め、鼙以て之を止め、𢿱澫【13】以て士を壮んにし、喬山以て之を退く。威と謂う所有り、恭と謂う所有り、裕と謂う所有り、一と謂う所有り、断と謂う所有り。陳公狂焉(ここ)に楚邦の故を選し【12】

この箇所も、楚王が陳公に対し、執事人を助けて軍隊を整えるよう命じたことが語られている。その内容は主に、隊列や打楽器を用いた行軍の方法についてである。

第10簡と第11簡は、排列に問題はないと見られる。第13簡と第12簡は、「〇以△□」という句型から考えれば、このように排列できる可能性がある。第11簡と第13簡については、前後のつながりが不明瞭であり、そのままつなげて読めるかどうかは確定できない。

[16、17、18、19、20]

之曰穽（弇）行一、女（如）閔（閔・門・掩）[注31]、女（如）逆閔（閔・掩）、女（如）開（開・關）阬（術・隧）[注32]、女（如）戎（攻）阬（術・隧）、女（如）御（禦）追[注33]、必新（慎）……【16】

楢（檐・擔）徒、州（調）亓（其）徒戋（衛）[注34]一、女（如）既梁（竭）[注35]城安（焉）、紳兩和而紉之[注36]一。必新（慎）……【17】

……徒虖（甲）居逡（後）、申（陳）於墅（障）、則徒虖（甲）進退、【18】

申（陳）於隓（墮）陓（阬・崗）[注37]、則鳶（雁）飛、申（陳）於娙（埕・涅）墨（舉・野）[注38]、寀（深）卉（艸）[注39]霜零（露）、車則……【19】

……倆（兩）申（陳）逡（後）、乃右柰（靡）左柰（靡）、申（陳）後若繩（龜）[注40]、或倆（兩）申（陳）前、右柰（靡）左……【20】

之を弇行と曰う。如えば掩、如えば逆掩、如えば関隧、如えば攻隧、例えば禦追、必ず慎みて……【16】

檐徒、其の徒衛を調し、如し既に城を竭くせば、両和を紳いて之に紉ぶ。必ず慎みて……【17】

……徒甲 後に居り、障に陣すれば、則ち徒甲進退し、【18】

墮崗に陣すれば、則ち雁飛し、埕舉・深草・霜露に陣すれば、車は則ち……【19】

……両陳後、乃ち右麾し左麾し、陳後は亀の若く、或いは両陳前、右靡し左……【20】

前述の通り、これらは『陳公治兵』簡なのかどうかは疑わしい。ここには具体的な兵法が書かれていることから、『陳公治兵』簡とみなされたのではないかと考えられる。

以上のように、本篇は、竹簡の排列・復原が非常に困難であるが、おおよそ以下のように分類できるであろう。

第一は、楚の先王・先君の戦歴についてである。第2簡～第4簡は比較的文意が明確であり、楚の熊雪・屈𠬝・武王・文王・荘王に関わる戦争が時系列順に示されている。その中で、蒲騒の戦いと両棠の戦いは伝世文献にも記載があり、楚国が大勝している。このことから推測すると、本篇に記載されている戦歴は、楚国にとって模範となるものであったと考えられる。もしこの部分も陳公と楚王の対話の内容であるとすれば、戦争や軍隊について論じている中で、実践の事例として挙げられたものかもしれない。そうであるならば、これらの竹簡の前には別の簡文があったと推測される。ただし、本篇全体の中でこれらをどこに配置すべきかについては、現段階では確定的なことは言えない。

第二は、楚王と陳公との対話である。本篇の第5簡以後は、楚の先王・先君についての記述はなく、陳公・楚

王以外に、執事人・将軍・左右司馬らが登場する。楚王と陳公の対話部分は残欠があるために完全ではないものの、行軍や作戦に関する内容であることは確実である。ただし、これが実践についてなのか、それとも軍事演習についてなのかは、簡文から推測することは困難である。また、楚王と陳公の問答の回数も不明であり、これらは現時点では解決できない問題である。

第三は、具体的な兵法についてである。本篇では、軍の隊列、打楽器を用いる方法、攻撃・迎撃・追撃・防御の方法などが具体的に示されている。これは、陳公が楚王に対して述べた挙例や理論なのか、実際の兵法を挙げたものなのか、あるいは別の文献が混入しているのか、現時点では確定できない。上博楚簡は、全文献の公開がまだ完了しておらず、未公開の文献や竹簡の残片の中に楚国に関するものもあると見られる。今後、それらが公開されれば、解決の糸口が得られるかもしれない。

小結

以上、本篇全体を検討し、可能な限り復原を試みた。依然として未解決の部分も多々あるが、少なくとも以下のことは言えるであろう。

一つは、本篇全体をおおまかに分類すると、①楚の先王・先君の戦歴、②楚王と陳公との対話、③具体的な兵法の三つに分類できるということである。

もう一つは、本篇全体を総合して排列することはできず、全簡が『陳公治兵』の竹簡であるかどうかも疑わしいということである。上博楚簡は依然として未公開の文献があり、それらが公開された後に、改めて検討できる可能性がある。

本論においては、『陳公治兵』の内容の基礎的な整理・分類にとどまった。本篇に見える治兵の論理や兵法については、別稿において改めて検討したい。

注

(1) 竹簡の一覧表については、林清源氏がすでに論文中に掲載しているが、ここでは全体の状況を確認するために、筆者も作成して掲載する。

(2) なお、第2簡と第5簡も契口間の長さに問題があり、林清源氏もその点について疑問を抱いている。ただ、竹簡の内容や字体・書風から見ると、この二枚はその他の『陳公治兵』簡とは別のものであるとは考えがたい。竹簡の写真図版の縮尺の問題である可能性も考えられるが、現時点では不明であ

る。

（3）先行研究について、近年各説の引用の取り扱いについては注意を要する。例えば、武漢大学簡帛研究中心の「簡帛網」には「簡帛論壇」という掲示板形式のページがあり、竹簡の排列案や文字の考察などが投稿されている。こうしたコメントの部類は正式な論文ではないものの、意見の一つとみなされて論文に引用されるケースがたびたび見られる。ただし、本名が書かれていない（「網名」が使用されている）ことも多く、どこまで引用するかについては悩ましいが、本稿では網名を明記しつつ適宜引用する。

（4）整理者は、「迋」は「跖」の異文で、「蹠」と読み、「至」という意味であると述べる。蘇建洲氏は「迋」は『繫年』第36簡に見え、「適」と釈読すべきであるとする。

「迋」は、楚文字上でしばしば「跖」「蹠」と釈読されている文字であり、ここでは「ゆく」と読む。「固」については、整理者は堅固という意味で解釈しているが、語法上、「〇之行」という場合は地名を表すことが多く、これも何らかの地名と見られるが、現時点では詳細は不明である。

（5）整理者は「先居」を「先代」と釈読しているが、高佑仁氏は「楚邦少安、君王安（焉）先居災亂之上…」と読むべきであり、「焉」は「乃」、「居」は「處」の意味で、楚国がしばらく安定し、楚王がこの際にまず災乱の上に至って視察していることを示すと述べる。整理者が「災亂」（災難・動乱の意）と釈読している字について、張崇礼氏は、㝱𡑞（ ）は第14簡にも同字 が見え、網名「wqpch」が「深」と釈読していることに賛同し、さらに「㝱」と「甚」とは音が近く、「堪」と読むべきであるとする（『説文解字』「堪、地突也。」、段注「地之突出者曰堪。」）。そして、𡑞は、土に従い㕣声であり、おそらく「巒」であると述べ（『楚辞』王逸・九思・守志「陟玉巒兮逍遙。」、旧注「山脊曰巒。」）、この部分は、君王が突出した山脊の上に居り、士卒を見ていたことを表すと解釈している。林清源は、「危巒」と釈読し、険しい峰の意であるとする。

確かに、楚王が山や丘から軍隊を視察したことを表している可能性も考えられるが、字形の上では「災亂」の字であると見られるため、ここでは「災亂」と読んでおく。

（6）整理者は を「走」と釈読しているが、流行氏は「夷」と釈して「逸」と読むべきではないかとする。さらに楚文字上では「夷」と「夭」とはしばしば混用され、この字は土に従い夭声で、「狡」と釈読すべきではないかと述べる。そして、「狡兔」（すばしこいうさぎ）は『韓非子』や『史記』などの伝世文献に見えることを指摘する。蘇建洲氏は「夷兔」と釈して「逸兔」と読み、「夷」は包山楚簡第28簡、「兔」は上博楚簡『孔子詩論』第23簡・第25簡に見え、あるいは「雉兔」と釈して

も良いのではないかと述べる。

（7）蘇建洲氏は、整理者が「[illegible]」を「鄴」と釈読しているのは誤りであり、この字は『珍秦斉蔵印』（戦国篇、一四〇号）や包山楚簡に見える字であり、「蔡」と読む可能性があることを述べる。林献忠氏は、上博楚簡『孔子詩論』や『恒先』に見える「業」とは明らかに異なると述べ、「鄴」と釈読し、葉県を指すとする。そして、その用例として、上博楚簡『命』の「[illegible]（葉）」「[illegible]（鄴）」を挙げる。また、肩水金関漢簡や居延新簡・居延漢簡の「葉」の用例を挙げた上で、「簡文の内容は、楚の先君の戦争の多くが楚の辺境の地で行われていることに言及している。楚人と晋人とは鄴の地で戦争が発生すれば、黄河を越えて衛国を跨ぐ必要があり、地理上は現実的ではない。また、葉県は楚国の辺境であり、楚が開拓したとすれば、ここで隣国と戦争が発生したとしても理にかなっている。」と述べる。

この一文は、整理者は「戰於鄴、咎、師不絕。」と区切って読み、「咎」は鄴の地で災害に遭遇したことを指すと述べる（『説文解字』邑部「（咎）災也。」）。他の「師不絕」の句型を見ると、この箇所のみ唐突に災害について言及されていることになるため、「鄴咎」の二字が何らかの地名である可能性も考えられる。

（8）蘇建洲氏は、第3簡の「酋[illegible]」は、清華簡『楚居』第6簡の「酋[illegible]（＝霝雪）」、すなわち「熊雪」であるとする。張峰氏も同様の解釈であり、『史記』楚世家に見える仲雪のことであるとする（『史記』楚世家「熊嚴十年卒。有子四人、長子伯霜、中子仲雪。次子叔堪。」）。また、「熊雪子麻」は二種の読み方があり、一つは熊雪・子麻とするもの、もう一つは熊雪の子の麻とするものであるが、子については史書には記載がなく、人名と戦役については待考、と述べる。

（9）単育辰氏は、「猿旗」と釈読すべきであり、動物の名に鼠の旁が加えられる例は曾侯乙墓簡などによく見られると述べる。

（10）蘇建洲氏は、次のように述べる。「郙」はすなわち「巴」であり、巴国も越国と同じく令尹の官職があり、清華簡『繫年』第二十章、第一一一簡に「以與戉（越）命（令）尹宋（盟）于」とあるのは、おそらくみな楚国の影響を受けたものである。『左伝』の中で楚・巴の関係を示す最も早い記事は魯の桓公九年（楚武王三十八年）であり、この説が成立するならば、さらに早い熊雪の時代にはすでに楚と巴とは関係があったと考えられる。

（11）整理者は、「時」を「待」と釈読している。一方、林清源氏は「持」と釈読し、「持」と「執」とは同義であり、「執」には捕らえるという意味があることから、この箇所は、楚と巴の令尹とが交戦して楚が勝利し、巴の令尹を捕えたという意味であると述べる。

(12) 高佑仁氏は、整理者が「英」と隷定している字は「艸」に従い「甫」声であり、曾侯乙墓竹簡（第一四二簡・第一四三簡）に見える「莆」と同様の文字である。簡文の「先君武王與鄖戰於莆寞」とは蒲騷の戦いを指し、「莆」は「蒲」と読むべきであり、簡文の「蒲寞」は「蒲騷」の異名である、と述べる（これについては、網名「汗天山」氏がすでに地名とみなして「蒲寞」と釈読している）。

ここでは、この解釈に従って「蒲寞」と釈読し、蒲騷の戦いを指すと解釈する。蒲騷の戦いとは、『左伝』桓公十一年（前七〇一年、楚武王四十年）に楚と鄖との間で起こった戦争である。楚の大夫屈瑕が貳・軫の両国と同盟を結ぼうとしていると、鄖が蒲騷で兵を集め、随・絞・州・蓼の四国と共に楚を攻めようとした。屈瑕は鬬廉の意見を受け入れ、自ら兵を率いて防衛にあたり、四国の攻撃に備えた。そして、鬬廉が精鋭部隊を率いて蒲騷を夜襲し、鄖軍に大勝した。そこで楚は、貳・軫両国と同盟を結んで軍を引きあげた。

(13) 整理者は「戰於涂漳之滸」と釈読しているが、張峰氏は「涂」は「沮」と釈読でき、この点は網名「鳲鳩」がすでに指摘している。漳水と沮水は合流して交叉する所があり、作戦の地点が二つの水辺である可能性がある、と述べる。頼怡璇氏も「沮漳」と釈読する説に賛同するものの、「涂水」は江蘇、「漳水」は山西が来源であり、距離があることから、「涂」は「豫」と読めるのではないかと述べる。『史記』亀策列伝の「漁者豫且舉網得而囚之。」は、『荘子』外物では「豫且」は「余且」に作り、また上博楚簡『周易』豫卦の「豫」の字は「余」（ ）声で表示されているため、簡文の「涂（豫）漳之滸（滸）」は、楚国の境内と豫章水を指す可能性を指摘している。また、「戰於涂漳之滸、師不絕」については、この地での戦役は『左伝』定公二年の記事に見えるのみであるが、この時、楚軍は敗れているためにこの二つの事件は関係がないと見られる、と述べる。林献忠氏も「沮漳」と釈読し、今の江西境内の豫章水は楚国の東境に位置すると述べる。

(14) 両棠の戦いについては、同じく上博楚簡の楚国故事の一篇、『鄭子家喪』にも見える。『鄭子家喪』は、鄭の子家の死をめぐって楚の荘王（在位、前六一四～前五九一）が鄭を包囲するに至り、さらに鄭を救援した晋と両棠で戦い、大勝するという内容である。

(15) 整理者は「來」に従い「戈」に従う字であるとしているが、蘇建洲氏、張峰氏、張崇礼氏らは、これは楚簡によく見られる「仇」字であると述べ、「仇」と釈読している。

(16) 蘇建洲氏は、「既斯軍」は「既載軍」あるいは「既移軍」と読むべきであろうと述べる。林清源氏は、簡帛論壇上にて網名「鳲鳩」「苦行僧」が「斯」を「徙」と釈読しているのに賛同し、これは遷移の意味であり、将軍が比較的有利に戦闘で

きる場所に移動し、軍事行動の準備をしていることを指すと述べる。張崇礼氏は、「斯軍」の「軍」は「營壘」（軍営・陣営）を指すと述べる（『左伝』成公十六年「宋・齊・衛皆失軍。」、兪樾『群経平議』左伝二「軍者、謂營壘也。」）。そして、後文の「伓（背）軍而陣」の「軍」もまた軍営であり、「斯」は「離」と読み、離れるの意味であるとする（『爾雅』釈言「斯、離也。」、『方言』巻七「斯、離也。齊・陳曰斯。」）。

(17) 蘇建洲氏は、「不知進師徒[illegible]於王所」の[illegible]は、整理者は「恆」と釈読しているが、これは楚文字によく見られる「恆」「極」の訛誤であり、「極」と釈読し、到達の意味であると述べる。また、郭店楚簡『緇衣』第32簡に「[illegible]以行」とあり、多くの学者はこの字を「極」と釈読していることを指摘する。

(18) この箇所は、「不知～乎」の用法で、「知らず～や（か）」と読み、「一体～～か」「結局～～なのか」という意味で解釈する。

(19) 程燕氏は、「𡨦」は、宀に従い麥声であり、「陵」と釈読する。そして、『文選』の注が引用する『蒼頡篇』に「陵、侵也。」とあることから、「啓卒陵行」とは、士卒を鼓舞するには常に戦闘に参加するための士気が必要であることを言っていると述べる。張崇礼氏は、『説文解字』に「夌、越也。」とあり、「啓」「發」は発動の意味、「行」は王卒の行列、「王卒」は楚国の王族が組織した軍隊を指すと述べた上で、『左伝』成公十六年の「楚之良、在其中軍王族而已。請分良以擊其左右、而三軍萃于王卒、必大敗之。」を挙げる。そして、「啓卒陵行」とは、士卒を発動して越え（横切り）、王卒の行列に進入していることであり、それゆえ後文で「入王卒」「深入王卒」と言っている、と述べる。蘇建洲氏は、整理者は「[illegible]」を「𡨦」と釈読しているが、「夌」とすべきであり、包山楚簡の「陵」を[illegible]と作る例を挙げる。そして、「夌行」は「屯行」と釈読すべきであり、集まって行進するという意味であるとする（『史記』李将軍列伝「東道少回遠、而大軍行水草少、其勢不屯行。」、裴駰『史記集解』引張晏「以水草少、不可群輩。」）。また、上下二句の「進師徒」と「啓卒夌行」、および「極於王所」と「納王卒」が関係しているとする。さらに、整理者が「王卒」を王兵、王の自衛兵と解釈しているのは正しく、燕国の兵器上に見える「王萃」は「王卒」のことであると述べる。林清源氏は、「夌」を「領」と釈読し、「啓卒領行」とは士卒を動かし、行伍を率いるという意味であるとする。

(20) 高佑仁氏は、「女」は「如」と読むべきであると述べる。

(21) 張崇礼氏は、整理者は「[illegible]」を「噬」と釈読しているが、この字は楚文字でしばしば見られ、郭店楚簡『老子』第22簡のこの字は今本では「逝」に作り、『説文解字』に「逝、往也。」とあることから、この箇所は師徒を整えに行くという意味である、と述べる。林清源氏は、「[illegible]」は「噬」「誓」「逝」と釈読でき、「澨」の異体字が「設」であることから、「設整」

と読むことができると述べ、『韓非子』に「整設」という用例があることを指摘する。

(22) 整理者は「厚」を「不薄也、重也。」と解釈している。林清源氏は、整理者に従って「厚」と釈読し、増益の意味であるとする。張崇礼氏は、「厚」と「遘」とは音通することから、「遘」と読むべきであるとする（『説文解字』「遘、遇也。」）。そして、王は陳公に「汝入王卒而毋止師徒、毋亦善乎」と言っているが、この陳公の「動之於後」は、師徒を指揮して前進し、王卒に遭遇したという意味であると述べる。

(23) なお、上博楚簡の楚国故事では、楚王と臣下との対話の場面で、会話の中では「君王」、地の文では「王」の呼称が使われている（拙稿「中国古代における王の呼称―上博楚簡『鄭子家喪』を中心として―」、『待兼山論叢』（哲学篇）第四十三号、二〇〇九年）。

(24) 張崇礼氏は、整理者は「緹」を「盈」と釈読しているが、「懲」と読むべきであるとする（『説文解字』「懲、戒也。」）。下文に「師徒皆懼」とあり、何らかの恐れる事柄があったと考えられるため、この解釈に従う。

(25) 整理者は「命相敷浣」と釈読しているが、これに対して張崇礼氏は、次のように述べる。「相」は一方が別の一方に対して行う動作、「敷」は「佈」、緩は慢の意味である。また、「列」は、元々の字形は「[illegible]」に作り、これは単育辰氏の解釈である。「軠」は多くの学者は「倅」と釈し、「副車」の意味であるとする。この字と「萃」は古代の軍隊の一級組織の単位であり、また後世の「隊」のことである。「率」は、『爾雅』釈詁上に「率、循也。」とある。「従」は、従うという意味である（『左伝』隠公六年「長悪不悛、従自及也。」、杜預注「従、隨也。」）。「濃」は「廢」と読むべきであり、壊れるという意味である。執事人は必ず命令を発布することをよしとし、命令の発布が時機にかなわなければ、行列は形成されず、隊伍はぐずぐずと行われ、命令は破壊され、機能を果たすことができなくなる。

林清源氏は、網名「汗天山」が「敷（輔？）緩（援？）」と釈読している説に賛同し、「輔援」の語は『論衡』などの漢代の典籍に見え、この箇所では、互いに補佐し支援するという意味であると解釈している。

「敷」と「扶」は音通し、「緩」と「援」も音通することから、「扶援」と釈読し、助ける、援助するという意味であると考える。「濃」についてはそのまま法令の意味で解釈し、隊列が適切に行われなければ、法令によって罰則が施されることを示していると解釈する。

(26) 張崇礼氏は、第11簡と第13簡とは綴合できると述べる。また、「將」は統率の意、「五毋」は鉦鐸の類を指し、毋は挙げるという意味もあることから、鉦鐸の類は手に持って挙げ、

振動して発声させると述べる。

(27) 蘇建洲氏は、整理者は「[illegible]」を「跪」と釈しているが、「坐」と釈すべきであり、下句の「起」と対応していると述べる。

(28) 張崇礼氏は、第13簡と第12簡とを綴合すべきであり、「䢅漫以戕士、喬山以退之」と前文の句型とは同じであり、䢅漫、喬山も鼓鉦の類であると考えられるが、その具体的な意味は待考としている。

(29) 林清源氏は、網名「汗天山」や張崇礼氏が「裕」と釈読している説に賛同し、寛容、寛緩という意味であるとする。

(30) 高佑仁氏は、「有所謂一、有所謂𢧵」の「𢧵」は、整理者は「專」と読んでいるが、文義から見ると「斷」と読むのが妥当であり、「𢧵」とはすなわち『説文解字』の「斷」の古文であり、簡文の「一」とは専一（一意専念する）、「斷」とは果断（思い切りがよい）のことを指すと述べる。

(31) 蘇建洲氏は、「門」に従い「戈」に従う字（[illegible]）は、清華簡『繫年』第一〇一簡・第一一三簡によってすでに「門」と読むことがわかっており、攻城の門のことであるとする。「門」に従い「幵」に従う字（[illegible]）は、整理者は「開」と釈しているが、これは誤りであり、この字は上博楚簡『卜書』にも見える「關」の字であり、閉、守の意味であると述べる。張崇礼氏は、「閔」は「掩」であり、攻撃の意味であるとする。また、『説文解字』に「逆、迎也。」とあり、「逆掩」とは迎撃のことであると述べる。

(32) 張崇礼氏は、「阱」は整理者は「術」と読んでいるが、「隧」と読むべきであり（『左伝』襄公二十五年「初、陳侯會楚子伐鄭、當陳隧者、井堙木刊。」、杜預注「隧、徑也。」）、隧とは小路、特に険要な関所を指すとする。

(33) 「御追」について、整理者は「追」とは馬を使って追撃することであると解釈しているが、蘇建洲氏は「追」は「辵」に従い「亘」に従う字であるとする。これに対して張崇礼氏は、字形から見ると、両者の説ともに可能性があるが、文意を総合して考えると、「追」と釈読すべきである。「御」は、「禦」と読み、抵禦（防御する、抵抗する）という意味である。「禦追」とは、防御と追撃のことである。禦と追、閔（掩）と逆閔（掩）、関隧と攻隧は、相反する軍事行為である、と述べる。

林清源氏は、第一組は「閔〈閟〉（閉）」と「逆閔〈閟〉（閉）」、第二組は「開（扞）阱（術）」（護衛の意）と「戎（攻）阱（術）」、第三組は「御（禦）」と「追」で、すべて攻守の戦術用語であると述べる。

(34) 林清源氏は、網名「易泉」が「檐徒州（周）其徒衛」と釈読する説に賛同し、「檐（擔）徒」と「徒衛」は部隊の構成要員であると述べる。また、「州」と「周」とは音通し、さらに「調」と読み替えることができるとして、徒衛を寄せ集めるという意味であると述べる。

(35) 張崇礼氏は、整理者は「[illegible]」を「梁」と釈読しているが、この字は上博楚簡『容成氏』第25簡、上博楚簡『中弓』第19簡・第20簡にも見え、「水」に従い桀声であり、枯竭の「竭」（亡、敗の意味）であると述べる。

(36) 張崇礼氏は、整理者は「陳兩和而紉之」と釈読して「意似陣、和相合」と述べるが、「紳」は「引」と読むべきであり、引領の意味である。「兩和」とは、宮城の門を守備する軍士のことであり、『韓非子』などにその用例が見える。「紉」とは連結するという意味であり（『楚辞』離騒「扈江離與辟芷兮、紉秋蘭以爲佩。」、蔣驥注「紉、結也。」）、「紳兩和而紉之」とは、左右の軍門を守備する軍士を率いて共に集まることを指す、と述べる。

(37) 張峰氏は、「陓」字は簡帛論壇上ですでに「阬」と釈読されており、これは正確である。古書中の「阬」字は「崗」の古字であるとみなされていることから、この箇所も「崗」と読むべきである、と述べる。林清源氏は、「陸」は「墮」の異体字であり、狭く長い小山のことであるとする。

(38) 張峰氏は、「𡊮」を「埕」と釈読する（『方言』巻六「埕、埝、下也。凡柱而下曰埕、屋而下曰埝。」、銭繹箋疏「『廣雅』「埝、下也。」『説文解字』「涅、黑土在水中也。」涅、埕古今字。」、『説文解字』土部「埝、下也。」、王筠『説文句読』「下者、陷而下也。」）。そして、簡文の「埕」と「崗」とは対文になっていると述べる。林清源氏は、「𡊮」は「與」声であり、「予」声と通じることから、曹建敦氏の「野」と釈読する説に賛同する。そして、「涅野」とは沼沢の類の地形ではないかと述べる。

(39) 蘇建洲氏は、「深卉」の「卉」は「艸」と釈読すべきであり、楚簡に多く見られると述べる。

(40) 「陳後若繩」の「繩」は、整理者は「龜」と釈読し、一方、網名「youren」は「繩」と釈読し、作戦の法と解釈している。これに対して張峰氏は、楚文字の「黽」と釈読できる文字、および「黽」に従う文字はすべて「龜」と釈読すべきであり、ここは整理者の解釈に従うべきだと述べる。

【参考文献】

▼武漢大学簡帛研究中心・簡帛網（http://www.bsm.org.cn/）

・程燕「読《上博九》札記」（二〇一三年一月六日）

・蘇建洲「初読《上博九》劄記（一）」（二〇一三年一月六日）

・何有祖「読《上海博物館蔵戦国楚竹書（九）》札記」（二〇一三年一月六日）

・張峰「《上博九》読書筆記」（二〇一三年一月七日）

・高佑仁「《上博九》初読」（二〇一三年一月八日）

・流行「読上博楚簡九劄記」（二〇一三年一月八日）

・単育辰「佔畢随録之十六」（二〇一三年一月九日）

・蘇建洲「初読《上博九》劄記（二）」（二〇一三年一月十四日）

・頼怡璇「《上博九・陳公治兵》簡4「戰於涂（豫）漳之口（滸）」考」（二〇一三年五月三十一日）
・許名瑲「戦国簡帛総括範囲副詞「各」探究」（二〇一三年十一月七日）
・林献忠「読《上博九・陳公治兵》劄記二則」（二〇一五年一月八日）
▼復旦大学出土文献与古文字研究中心（http://www.gwz.fudan.edu.cn/）
・張崇礼「読上博九《陳公治兵》劄記」（二〇一三年一月二十九日）
・曹建敦「上博簡《陳公治兵》研読札記（一）」（二〇一三年四月三日）
・曹建敦「上博簡（九）《陳公治兵》研読劄記（二）」（二〇一三年四月二十三日）
・馬楠「上博九《陳公治兵》初読」、清華大学出土文献研究与保護中心、二〇一三年四月二十二日（未見、林清源氏が論文中に引用）。
・林清源「《上博九・陳公治兵》通釈」、「第四届古文字与古代史国際学術研討会―紀念董作賓逝世五十周年」論文集、台湾歴史語言研究所、二〇一三年十一月二十二日～二十四日。
・蕭聖中「上博九《陳公治兵》字詞劄記二則」、「中国簡帛学国際論壇二〇一四」（於シカゴ大学）、二〇一四年十月二十四日～二十六日。

【謝辞】本稿の執筆に先立ち、二〇一五年三月七日に行われた「「漢學」國際學術研討會」（東亞漢學者之會主辦、於台湾・致理技術学院）において口頭発表を行った。本稿は、その折の原稿に修正を加え、定稿としたものである。本稿の執筆過程中、日本学術振興会外国人特別研究員・安陽師範学院講師の曹方向氏の助力を得た。また、本稿の校正中、「第7回東アジア文化交渉学会」（二〇一五年五月九日・十日、於開成町福祉会館）にて「上博楚簡『陳公治兵』の文献的性格」と題して口頭発表を行い、その際に賜った御意見・御教示については、今後改めて検討したい。関係者各位に対し、ここに感謝の意を表する。

本研究は、ＪＳＰＳ科研費（課題番号２６８８４０６９）の助成を受けたものである。